【エントリー情報】
自治体名：埼玉県加須市
学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：加須市立不動岡小学校
ご記入者：堀口孝人

【設問】 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500 文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

現代社会は、Society5.0 と呼ばれる時代がすぐそこまで到来し、AI などの技術革新のスピードは凄まじい。このような社会を生き抜くためには、変化を前向きに受け止め、豊かな創造性をもち、仲間と協働しながら予測困難な事態にも対応する力を身につけた児童の育成が急務である。また、令和元年度より新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、臨時休業や学級閉鎖などを余儀なくされた。これらのことにより、学習の機会と学力の保障、学校の役割が再認識された。ICT 環境を整えることで、誰一人取り残すことなく、個別最適化された教育を実現することも可能となる。
そこで、本市では、日々の学習や生涯にわたる学びの基盤となる児童に育成したい資質・能力のうち、「情報活用能力の育成」を実現させるため、「加須市学校 ICT 活用推進計画」を策定している。基本方針を「ICT を効果的に活用し、新しい時代を生き抜く力を身につけた児童生徒を育成する」とし、情報活用能力の育成と学校 ICT を活用した指導法の改善の２つの基本目標を定めている。２つの基本目標は①１人１台端末を効果的に利用することにより、プレゼンテーション能力などの情報活用能力を育成するとともに、学校支援ソフトを有効活用し、学力の向上を図ること、②情報モラルなどの指導を充実させ、情報や技術を適切且つ安全に活用するための情報モラルを身につけさせることなどに重点を置いている。
また、２つの教育目標は①１人１台端末を効果的に活用した授業実践に向けた教職員研修を実施、②ICT を活用した授業を行うため、実践事例集を作成し、周知・活用を行うことなどに重点を置いている。 また、令和２年度の「教員の ICT 活用指導力調査」（文部科学省）によると、「授業に ICT を活用して指導する能力」や「児童生徒の ICT 活用を指導する能力」について、「できる」「ややできる」と回答した教員は 70%前後で、本市の目標 100%からは大きくかけ離れている。それらの指針を受け、本校では「ICT を活用した授業の推進」を基本目標に定め、１人１台端末の効果的な活用を目指している。 デジタルかアナログかのような二項対立の陥穽（かんせい）に陥らず、教育の質の向上のために、どちらのよさも適切に組み合わせて活かしていく必要がある。しかし、ICT の活用の仕方がわからないというのであれば、その土俵にも立てないことになる。そのためにも、まずは教員自ら研鑽（けんさん）に励み、ICT を活用していかなければならない。そのきっかけとして、ICT 支援員を活用し、校内研修の機

会を設けて教員の ICT 活用機会を増やしている。また、授業に積極的に ICT 支援員に参加してもらい、児童の情報活用能力(操作)の育成を図っている。児童に情報活用能力が少しずつ身についてくれば、主体的に児童が 1 人 1 台端末を利用したいという雰囲気になる。もちろん授業の指導計画は教員が考えるが、児童が主体的に取り組む姿を想像できれば、教員が ICT を活用した授業展開を考えることにつながる。 このように、「加須市学校 ICT 活用推進計画」に基づき実践事例を積み重ねることで、ICT を活用しやすい環境をつくり、効果的な活用法を見いだすことにつながる。そして、学力の向上、豊かな人生を切り拓く力の育成につながっていく。

目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦労を教えてください。（1,500 文字以内）

学校全体で ICT を活用していくことが非常に重要であると考える。しかし、教員間の技能や学年によって活用が難しい状況にある。例えば、これからたくさん吸収していこうという教員は、意欲はあるものの、どのように効果的に使用していくといいのかわからず、アナログの方法を行う教員が多い。それに対し、アナログの引き出しをいっぱい持っている教員は、切り替えるために新たに ICT の教材を作らなければならないため負担が大きく、なかなか一歩踏み出せないでいるように感じる。また、低学年はキーボード操作がうまくできず、1 人 1 台端末の活用が難しいため、なかなか全体に広めていくことが困難な状況となっている。
そこで、1 つ目に職員打ち合わせの時間を利用して、ミライシードの操作説明や新機能について伝達する時間を設けた。実際に操作をしてみると、思ったより簡単に行えるものもあり、打ち合わせ後に操作について詳しく教えてほしいという教員も現れた。しかしながら、児童に操作手順を教えなければ学習に取り組めないため、授業時間内に操作の指導と学習内容の指導の 2 本立てでは終わらないため活用が難しいという課題も見られた。そこで、本時とは違う場面で、簡易化した操作を練習する時間を設け、操作に慣れてもらうことにした。例えば、挙手で済むような簡単なアンケートも、ICT を使うことで慣れていき、本時で混乱が少なく使用できるようになった。
２つ目に、始めから作らなければならないという労力を軽減するため、応用しやすいテンプレートを複数作成し、それらをアレンジしていけばすぐに授業などで使用できるようにした。更に ICT 支援員とも連携し、使用できそうなテンプレートを探してもらい、教員に情報提供した。テンプレートのストックが増えていくため、活用する際は多くのものから自分にあったものを選ぶことができるようになった。しかしながら、こちらの情報提供が速いと「まだ計画が立てられていない」となかなか話を聞いてもらえなかったり、遅いと「もう授業の

準備をしてしまった」と活用できずに来年度を迎えることになったりすることが多々あった。そのため、事前に準備をしたうえで、定期的に声をかけることで、利用してもらえる回数が増えてきた。
３つ目に、ICT 支援員の効果的な活用を呼びかけた。教員は常に児童のことを考え、教材研究に取り組み、教材づくりを行っている。私もそうであるが、教具の開発やプリント作成に力を入れることに加え、デザインにまでこだわってしまい、教材づくりに時間がかかってしまいがちである。そうすると、特にデジタル教材は、細かい設定や配色などにまでこだわると、退勤時間が遅くなってしまい、教職員の働き方改革に逆行した動きになってしまう。そこで、教材の目的や大まかなレイアウトを ICT 支援員に伝え、ICT 支援員によりよい教材にブラッシュアップしてもらうことにした。それを自分で最終調整することで、簡単に教材を活用することができるとともに、児童も主体的に取り組むことができた。しかしながら、ICT 支援員の来校日と単元・教材づくりのタイミングがうまく合わないことや、事前打ち合わせをする時間が多く取れないまま授業に入ってしまうという課題も生まれた。そこで、事前の打ち合わせを計画的に行うことによって、少しずつ改善することができてきた。
いずれにしても、まずはできることから進めていき、学校全体としての課題や効果的な取り組みを見いだしていきたい。また、教職員の働き方改革の中で、いかに短時間で効果的な教育活動が行えるのかを意識し、ICT 活用していけるように、もっともっと機会を増やしていく必要がある。

(3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。（2,000 文字以内）

ICT を活用することにより、事務作業などの削減につながり、短期間での効果的な教育活動や教職員の働き方改革につながっていると考える。また、児童の主体的・対話的で深い学びのために、効果的なツールとなっていると考える。
一度作成したものは、データとして残すことができるため、同じようなものを作成する際に、コピーしたものを編集したり、ほかの教職員と共有したりして有効使用することができる。また、紙媒体に印刷をしなくてもよい場合も多く、授業中に当初の予定にはなかったが使用したいと思ったときや、訂正があった場合などもすぐに修正がしやすく、授業の流れを止めることなく進めることができる。また、昨年度までの児童の作品をデータとして保存しておくと、児童はゴールがわかり見通しを持って学習に取り組むことができる。
また、教師は、学びの質を重視した授業改善にデータを活用することができる。さらに、児童の学習の様子やアンケートを瞬時に集計することができることで、授業改善に加え、校務削減にもつながっている。 また、児童が主体的に取り組もうとする態度も見られる。学習

が苦手な児童も、ICT を使用したいと思い、意欲的に取り組むだけではなく、自分の苦手なところを協働的な活動で補ったり、個別最適な学習方法を選択することで解決に一歩近づいたりすることができる。また、意見を言うのが苦手な児童も、匿名にするなどの工夫を加えることで、意見を伝える機会が与えられたり、発表の補助になったりするため、活発な話し合い活動のきっかけとなる。
したがって、主体的・対話的で深い学びへつながっていると考える。加えて、一度操作の仕方を習得した児童は、係活動や委員会活動などにも使用範囲を広げている。例えば、レク係では、昼休みに遊びたいことをアンケートにして送ったり、クイズ係では、問題文をオクリンクのシートに作ったり、その回答を係の人に送ったりと、自分たちで効果的な使用法を考え、活用している様子が見られる。
そして、児童が思考を深めるための重要なツールになっている。例えば、四角形や三角形の面積を求める学習では、画面上で図形をコピーしたり切り取ったりできることに加え、何度でもやり直しが効くため、安心して挑戦することができる。また、様々な考え方を記録に残すことができるのも特徴だと考える。個人で考えた多くの思考を残せるだけではなく、データにすることでそれをすぐに共有することができるため、学級全体の思考を各個人が保存することができる。従来の授業であれば、板書された「友達の考え」をすべてノートに写し取ることは時間的にも難しく、また、ノートに取ることに一生懸命になってしまい、内容や説明を聞くことが難しい児童も多くいた。
しかし、ICT により、説明をしっかり聞いたうえで、自分の考えに合った考え方のみを保存するなど取捨選択して、自分のオリジナルデジタルノートを作ることも可能となった。これらのことから、情報の整理・比較などの情報活用能力の育成にもつながっていると考える。
しかしながら、キーボード入力や ICT 機器の操作の能力によって個人差が大きく出てしまったり、本来の力が発揮できなかったりする場面も見られた。また、キーボード入力による変換やコピー・ペースト機能により、書くよりも簡単に文書などが作成できるものの、自分で作成した文書の漢字が読めなかったり、要約せずに転写するだけになってしまったりするという問題も見られた。
そこで、キーボード操作が苦手な児童には、手書き入力や音声入力を活用するだけではなく、ノートに書いたものを写真に撮って送らせるなど、やり方を選択・判断させることで解決することも可能である。また、コピー・ペースト機能を多用しようとする児童には、推敲する場面でどういうことなのかを口頭で説明させたり、具体例を出させたりすることや、文字数を制限することで要約することにつながり、少しずつ作文をよりよいものにしていくことができる。さらに、「要約（短くまとめることが）できた」「わかりやすく説明することができた」などを振り返りの項目に入れることで、自己評価することもできる。

お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが

役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。 ※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1 つのエピソードに絞る必要はございません。（2,000 文字以内）

今回の学習では、社会科の「情報産業とわたしたちのくらし」の単元で「ニュース番組の作り方や工夫・努力を知り、4 年生に委員会活動のことを伝えるニュースを作ろう」という学習問題を設定し取り組んだ。そこで、まずは「調べる」場面で、ジグソー法を使って、調べたことをまとめて伝え合い、それらの知識を活用してニュース番組を作成・編集を行った。各委員会で集まり、「情報収集」「編集会議」「取材」「原稿作成・映像などの編集」「アナウンサー」「番組編集長・副調整室」の仕事内容や工夫や努力などを調べる担当を興味・関心に基づいて割り振った。各委員会の担当者が集まり、協働しながら調べ学習を行った。その際の情報共有でオクリンクが大変重要な役割を果たした。
例えば、「情報収集」を調べた児童が作成したシートを担当者全員が互いに送り合うことで、まとめることが苦手な児童も、必要な知識がまとめられなかった児童も、それらを補うことができた。また、「このまとめ方や書き方がわかりやすい」と児童自身が感じるため、今度はそれをモデルとしてやってみようと全体のレベルを上げることも可能である。
次に、それらのシートを使って自分の委員会にまとめたことを伝える活動では、他委員会の担当者がまとめたシート（以下まとめシート）も活用しながら伝えることで、よりよい伝達をすることができ、伝える側も聞いている側も、知識が深まった。また、まとめシートを全員に共有したことで、伝達された児童が理解しやすいシートを選んだり、まとめシートを参考にしながらもう一度自分なりにまとめ直したりして、オリジナルノートを作成することができる。このことで知識及び技能に加え、思考力、判断力、表現力などの向上にもつなげることができた。
そして、実際のニュース作りの場面では、「原稿作成」・「カメラ」・「映像編集・字幕」・「音響」など、様々な役割を分担して行うため、共同編集や共有が不可欠となる。作成した原稿を全員に送信し、流れを共有する。それらを基にカメラワークや撮影場所、入れる効果音を考える。そして、動画を撮影し終えると、編集担当の人に送信し、テロップなどを入れる作業を進めていく。その間に次の原稿が届き…という形で同時にニュース番組が出来上がっていく。また、テロップなどの編集作業を行う際にはオクリンクにある矢印などのツールを用いることに加え、ファイルから取り込むこともできるため、今回のニュース番組に必要なテロップ用の枠などを教員から提供することもできた。したがって、これらの作業を進めていくうえで、オクリンクの機能は欠かせない。
例えば、Google ドキュメントや Google スライドなどの共同編集機能は同時に一つのものを作成することができるため大変便利である。しかしながら、誤って削除してしまったり、他人が編集することによって変化する画面に興味をそそられて集中力がかけてしまったりして、せっかくの機能を有効的に使用することができないこともある。また、多くの機能を

兼ね揃えているため、演出や音響効果など学習のねらいとは違うことに時間を費やしてしまいがちである。
さらに、今回はニュース番組という性質上、シートごとの動画の流れをいかにスムーズに進めていくかということが重要になる。ここで、タイマー機能が効果的である。動画の時間と同じ時間に設定することで、流れが止まってしまう時間を最小限にとどめることができた。
最後に、提出 BOX の使い分けもオクリンクの特徴である。今回のようにグループに分かれて様々な行動をしていると、児童の様子を評価するのが非常に難しい。だが、例えば、児童が自分でまとめたシートを提出 BOX①から回収することで知識・技能を評価することができる。また、伝達のあとに作成したオリジナルノートを提出 BOX②から回収することで、思考・判断・表現を評価することができる。また、ニュース番組で作成したものを③から回収するなど、提出先を分けることで、評価することが簡単になるだけではなく、学習履歴(スタディ・ログ)を残すことでも、主体的に取り組む態度の評価にも活用することができる。
これらのことから、交流した 4 年生からは、「本物のニュース番組みたいだった」という意見があった。また、シートごとに要点を動画でまとめたことから、「大事なことだけを話していてわかりやすかった」と大好評だった。「来年は〇〇委員会に入りたいと思った」などと、意欲の向上にもつながった。
５年生も、実際に番組を作成することで、ニュース番組作成の仕事内容や工夫を知るだけでなく、活用することができ、理解が深まった。また、番組作りの大変さや、協働することの達成感を感じていた。何より、学習の根源である「勉強は楽しい」という気持ちをもって、主体的に活動に取り組むことができた。